

新刊 Book reviews

□角野康郎：日本の水草 A5. 327 pp. 2014. 文一総合出版. ¥3,500 + 税. ISBN 978-4-8299-8401-7.

1994年の「日本水草図鑑」の刊行以来20年、常にわが国の水草研究の中心にいた著者の、絶滅種を含めた日本の水草、280種を網羅する作品である。レッドリストカテゴリー、固有種、特定外来生物、国内・外の分布などが、色付きのタグで表示されている。一頁に種類を配し、頁の約半分は生態を示すカラー写真、他は部分のアップや生殖器官、拡大写真などで、文章はせいぜい10行、1/5頁ほどだが、要領よくまとめている。

ヤナギタデが水生植物とは知らなかった。一方、ヒメカイウが載っているのにミズバショウは出ておらず、キショウブはあるのにノハナショウブはなく、モウセンゴケやイシモチソウもない、など... 著者の選別の苦勞が察せられる。「水草」に厳密な定義はあてはめられないし、本書はフィールド版を目指したもののなので、やたらに増やすことは避けたのだろう。けれども、前著で扱った約200種類は、たとえ見出しの席から引退しても、本書でもなんらかの形で触れられているうえ、最近増加した外来種や、新たに記録された在来種が付け加えられて欲しかった。

生育型を6色で象徴して頁の小口に示し、一々開かないでも目的の生育型の植物を選択できるようにしてあるが、これが使いにくい。一つは、色が優雅すぎて、視力の衰えた目には区別がつけにくい。もっと明瞭に識別できる色を使うべきである。それと、13 mmの長さに1色だったり3色だったり、さらに識別しにくくなっている。小口の長さは21 cmもあるのだから、色ごとの表示位置を異なる所に指定すると分かり易い。こういうことは、スタイルの問題ではなく、実際に使えるか否かの問題で、出版側の理解が必要である。ともあれ、わが国の自然環境を標徴する水生植物を調査研究するための、頼りになる図鑑ができたことは同慶の至りで、長年にわたる著者の努力に敬意を表する。

(金井弘夫 H. KANAI)

□勝山輝男・北川淑子：カヤツリグサ科ハンドブック 新書判. 88 pp. 2014. 文一総合出版. ¥1,250 + 税. ISBN 978-4-8299-8127-6.

大学生だった頃、植物社会学的調査をしていた。

森の中に入ってそこに出現する高木、垂高木、低木、草本をすべて書き出し、被度や群度を評価する、というものである。調査の際にいつも頭を悩ませるのがスゲの仲間であった。調査をする時に都合よく同定の鍵となる果胞をつけているとは限らず、植生調査票には“Carex 1, Carex 2, Carex 3, Carex 4, ...”と役に立たない情報が並ぶことになる。

カヤツリグサ科植物は、日本では26属約500種が記録され、その中でもスゲ属がほぼ半数の250種以上を占めている。カヤツリグサ科は種数が多いにも関わらず、葉はイネ科のように細長いだけで変化に乏しく、花や果実は小さく目立たないことから、一般にはほとんど興味を引きつけるものではないように思われる。しかし、ルーペを使って一度花や果実を観察すると、その多様性と造形の妙に驚かされる。この本はそんなカヤツリグサ科の多様性を、多くの写真と文により、初心者にも分かりやすく解説した小冊子である。

本書はまず、カヤツリグサ科植物の形態と用語の解説から始まる。カヤツリグサ科を記述する際には、普段はあまり使われない用語（たとえば「果胞」、「刺針状花被片」、「柱基」など）が用いられることから、特徴的な用語について、写真と分かりやすい解説がつけられている。次に属への検索表が挙げられ、ここでも写真が理解の助けとなる。主要な属の種への検索表と続いた後、スゲ属25種、シンジュガヤ属2種、ミカヅキグサ属1種、ヒトモトススキ属1種、テンツキ属8種、ハタガヤ属2種、ハリイ属6種、ウキヤガラ属2種、クロアブラガヤ属2種、フトイ属4種、ヒンジガヤツリ属1種、ヒメグ属1種、カヤツリグサ属22種が写真とともに解説されている。写真は自生地での生態写真、花序や果実のクローズアップ、根茎や葉鞘など、同定の際にポイントとなる部分を的確に示している。写真を眺めているだけでもカヤツリグサ科の多様性を感じ取ることができ、これまで「難しい」と敬遠していた人でも引き込まれるのではないと思う。

この本で紹介されている種は77種と、日本産カヤツリグサ科全体の15%程度にすぎず、実際に野外で出会うカヤツリグサ科植物がどの程度同定できるのかは疑問だが、カヤツリグサ科の多様性と美しさ、おもしろさは十分に伝わるのではないと思う。正確に同定するには、「ネイチャー

ガイド 日本のスゲ (勝山輝男著 2005 年 文一総合出版刊)」あるいは「日本カヤツリグサ科植物図譜 (星野卓二・正木智美著 2011 年 平凡社刊)」などを参考にするのがいいが、掲載種数が多い分、量の多さに圧倒され二の足を踏んでしまうおそれもある。本書くらいの分量がカヤツリグサ科について興味を引きつける「いい加減」なのかも知れない。

著者の二人は神奈川県植物誌調査会の中心となって活躍中で、「すげの会」の会員でもある。殊に勝山氏は当時の日本産スゲ属植物を網羅した上記「日本のスゲ」を上梓されたカヤツリグサ科植物研究の第一人者で、これまでに多くの新分類群、新産地を報告されている。「すげの会」はカヤツリグサ科植物のおもしろさに魅せられた人の集団で、会員数は 300 名を越え、年に一回の全国大会と会誌「莎草研究」の発行、同定会など、1990 年の発足以来、多彩な取り組みがおこなわれている。本書を読んでカヤツリグサ科に興味を持たれた方は、すげの会ホームページ <http://hos0.big.ous.ac.jp/~suge/index2.htm> を訪問していただきたい。(池田 博 H. IKEDA)

□鈴木庸夫、高橋 冬、安延尚文：草木の種子と果実 632 種 A5. 272 pp. 2012. 誠文堂新光社。¥2,800 + 税。ISBN 978-4-416-71219-1.

種子の美しい拡大写真 (方眼つき)、果序、果実のカラー写真、簡単な説明が、一頁に原則 3 種類ずつ見られる。ただ、どう使ったらよいか、著者の意図がわからない。配列は APGIII に基づくのだが、この図鑑の用途は、種子の同定が最も使いがあるだろうから、配列よりは、そういう点に工夫をこらしてもらいたかった。単に「新体系に並べた」だけでは、「もうひと頑張りを…」と声援したくなる。散布体のいくつかの形質を数値化して、一覧表に整理したらどうだろう。こういうことは誰かが始めれば追従する核ができて、発展してゆくものなのだが、その「誰か」が、著者自身であることが望ましいのは、言うまでもあるまい。(金井弘夫 H. KANAI)

□Cheplick G. P. and Faeth S. H. (著)：大園亨司 (訳)：グラスエンドファイト、その生態と進化 A5. 295 pp. 2012. 東海大学出版会。¥4,800 + 税。ISBN 978-4-486-01920-6.

先に「森島：野生イネの自然史」を紹介したとき、「エンドファイト」という、私の知らない単語が出てきてまごついた。岩波の生物学辞典には出ていなかったが、Jackson B. D. の Glossary で見つけた。冒頭の説明では、本書で扱うのは、主としてイネ科植物の組織内に共生する菌類である。共生というと、マメ科の根瘤やギンリョウソウの菌根を連想するが、グラスエンドファイトはそういう合体した特別な組織を作らず、植物体の細胞間隙に菌そのものとして生活し、見たところ「寄主」になんの影響も与えない。しかし菌の生産するアルカロイドが、寄主植物を食餌とする動物に毒物として影響を与えるために、食物連鎖、ひいては寄主の生態的地位に影響を及ぼす。特にイネ科植物では、穀物や飼料に用いられる有用植物が多い上、逆に、農業の場で駆除すべき雑草もまた多いために、その研究が進められてきた。麦角菌もエンドファイトの仲間である。

記者あとがきによると、ニュージーランドの基幹産業である牧畜に用いるペレニアルライグラス (*Lolium perenne*) は、イギリスから輸入されて広く使われる牧草だが、これを食べた家畜が中毒症状を起こし、生産量が激減した。そしてこの原因が一種のアルカロイドであり、牧草に感染した菌類によってもたらされるものであることが明らかになったことが、エンドファイト研究のきっかけになったと言う。菌類は寄主植物に影響を与えることなく生活し、寄主を「食害する」動物から守る役割を果たしているのだ。こういうエンドファイトの共生はイネ科牧草に限らず、イネ科やスゲ科の野生植物に広く見つかっており、生産するアルカロイドも様々で、食植動物の被害から寄主を守る役割を果たすばかりか、逆に、食べられることによって昆虫の体内に毒を蓄積する結果、その昆虫の自己防衛の役割を演じることさえあるという。アサギマダラ (蝶) は、食草のキジョランの毒を体内に保持しているために、肉食昆虫や鳥に捕食されにくいと言われている。だからと言って、エンドファイトによる毒成分の蓄積が、どの植物でも起っているわけでもないようだ。また、花部に入り込んだエンドファイトが、胎生化を引き起こす例も記録されている。

巻末の原著文献表には 698 件の作品が見られるが、著者名から見て、日本人の参加した文献は 6 件に過ぎない。原著論文数を 10 年ごとに集計し

てみると、2000 年以降 48% (2010 年以降はリストなし)、1990 年代 37%, 1980 年代 11%, それ以前 3% (最も古いものは 1920 年代) で、このテーマが、ごく最近注目されるようになったことが分かる。生業分野ではどうだろうか？

こうなると、事態は農業生産の問題を超えて、自然生態系の遷移にまで及ぶことになるが、まだそういう面からの取り組みは少ないらしい。こういう事例は栽培植物のみでなく、植物界一般に起っていると見なければならないので、農学分野の問題と見過ごしていると、自然の舞台裏の大事な出来事の解明に、遅れをとるおそれがある。動物の体内で生活する微生物が、寄主に対してそれぞれにがしかの働きをしているように、どの植物の体内にもこういう微生物が住んでいて、それなりの役割を果たしているのだろう。こうなると「単子葉類 (こういう単語はもう使えないらしいが) 特有の問題」と片付けるわけにもゆかない。

原著文献の他に、参考文献として 18 件がリストされているが、いずれも 2000 年以降のもので、ここには日本人の作品が 14 件含まれている。

なお、表題の末尾に国際図書番号 (ISBN) を表示してきたが、その後ろの (C で始まり E で終わる) C3045 ¥4800E は、わが国独自の「日本図書コード」で、3045 は本の形と内容を示し、¥以下の数字は税抜き価格を示している。これらのコードは会計処理上の便宜 (特に店頭での会計機 (POS) の操作) のために附加されたもの。ところがこれを税込み販売価格や送料を含む金額と誤解するむきもあるようなので、今後は日本図書コードは表示せず、価格は最初の見出しの中で「¥4,800+ 税」のように表示する。その方が誤解が少ないだろう。

(金井弘夫 H. KANAI)

□高橋英樹：千島列島の植物 A4. 509 pp. + 78 pls. 2015 年 2 月 27 日発行。北海道大学出版会。12,500 円 + 税。ISBN 978-4-8329-8216-1.

千島列島が日本領であった時代には宮部金吾・武田久吉・工藤祐舜・館脇操など北大分類学者がフロラ解明を目指して調査を行い、標本を集めた。多くの論文が発表され、一部の島のフロラは記録されたが、列島全体のフロラは刊行されなかった。太平洋戦争後千島列島は全体がソ連領土となり、日本人による研究は途絶え、ソ連との間で文献や

資料の交流もほとんど行われなかった。この間、ソ連・ロシア側の調査が進められ、極東ロシアのフロラははじめ多くの成果が刊行された (本書の「引用文献」に詳しい)。北大では千島コレクションは活用されず、千島のみならず樺太の植物研究も途絶えていた。

著者は北大植物園に就職以来北海道各地を採集してフロラ研究を始め、1995 年からロシアとの国際協力で千島列島の植物調査に参加した。この調査が本書をまとめるきっかけになったという。北方四島を日本の国土と主張しても現状は日本人研究者が自由に調査・採集できる場所ではなく、ここの調査ができたのは 2009 年であったという。著者が千島列島のほぼ全体像を得たのは 1995 年から 18 年かけて 7 回の現地調査を行った結果である。ロシアとの研究交流の難しさもあったと思われる。本書は北大コレクションに著者自身の調査結果を加え、ロシア人研究者の成果を検討してから取り入れて、まとめたものである。造本、紙質、印刷はよく、手頃で利用し易くできている。

本書は最初に 78 葉のプレートがある。色丹島・国後島などの景観と植物の生態写真、千島列島産植物タイプ標本 (カラー)、プレート 47-78 は各種の線画図集からなる。次いで要約と序から始まり、主要部分は第 1 章千島列島の概要、第 2 章千島列島の植物、第 3 章千島列島の植物リスト、第 4 章千島列島の植物分類地理からなる。Appendix として「1. 千島列島での植物標本採集者記録」、「2. 千島列島植物採集地名日対照表」、「3. 千島列島産維管束植物分布表」、「4. ロシア側の見解による千島列島の絶滅危惧維管束植物リスト」などがあって、引用文献、あとがき、索引からなる。「千島列島産維管束植物分布表」には証拠標本のあるもの、記録だけのもの、再調査が必要なものが分かるようにマークされている。最もページ数の多いのは第 3 章で pp. 61-366、維管束植物のリスト。科の配列は邑田・米倉『日本維管束植物目録』(1912) に従い、全種の学名と和名がある。新学名は見当たらず、新和名がいくつか含まれている。千島列島全体の在来 (自生) 1,129 種類、外来 198 種類が挙げられている。第 2 章の「3. 島ごとの地形と植物の特徴」から抜き出してみると、日本の北方四島では歯舞群島 332 種、色丹島 724 種でそのうち 77 種は外来種、国後島 1078 種で外来種 159 種、択捉島 872 種で外来種 111 種が

あるという。

本書の刊行によってようやく現在の日本国全土をカバーするフロラが整ったことになる。さらに、千島列島のより完全なフロラを作るためには今後も全シーズンを通して標本を作り、それらについて分類学研究を続けねばならない。それと共に著者と北大総合博物館 SAPS にはロシアとの研究交流を進めて千島列島を含むロシア極東部の標本と文献を充実して下さるようお願いしたい。それは日本のフロラ研究の進展のためにも重要である。

(大橋広好 H. OHASHI)

□田中美穂(編): 胞子文学名作選 四六判. 364 pp. 2013. 港の人. ¥2,600 + 税. ISBN 978-4-89629-266-4.

「胞子文学」とは何か。編者による造語で、『かすかでひそやかで、そして大胆不敵。そのような「胞子性」を宿した作品を「胞子文学」と名づけ、ここに集めました。』と前書きにある。すなわち、本書は「コケ、キノコ、カビ、シダ、海藻」など胞子をつくる生き物を扱った日本文学 20 作品を収録するアンソロジーである。驚くのは、表紙カバーに穴が開いていたり、作品ごとに紙の質や色のほか字体とその大きさと並べ方などが異なっていることである。この印刷屋泣かせのブックデザインは 2010 年に刊行された本書の姉妹編である「きのこ文学名作選(飯沢耕太郎編)」にならっている。

収録されているのは、小説 11 作品(小川洋子「原稿零枚日記」(抄録)、太宰 治「魚服記」、井伏鱒二「幽閉」、伊藤香織「苔やはらかに。」、多和田葉子「胞子」、川上弘美「アレルギー」、尾崎一雄「苔」、内田百閒「大手饅頭」、佐伯一麦「カビ」、栗本 薫「黴」、尾崎 翠「第七官界彷徨」)、詩 5 作品(永瀬清子「苔について」、谷川俊太郎「交合」、河井醉茗「海草の誇」、宮沢賢治「春 変奏曲」、

金子光晴「苔」)、俳句 3 名の作品(松尾芭蕉 2 句、小林一茶 3 句、野木桃花 1 句)、短歌 1 名の作品(前川佐美雄 3 首)である。コケが登場する作品が 10 作品と一番多く、キノコやカビが登場するものが 8 作品で、シダと海藻が登場するものは少ない。コケの登場する作品が多く収録されているのは世にある作品の数を反映していると思われるが、編者がコケの熱心な愛好者であることとも関係しているのかもしれない(編者には「コケと歩く」(WAVE 出版)という著書がある)。

いずれの作品も独特な世界を表現しているが、共通しているのは非現実の世界を創出するため、普段目にしない生き物を登場させていることである。これは小説や映画の常套手段である。全く知らないわけでもなく、といって説明もできない生き物のえも言われぬ存在感が読者や観客の自分の依って立つ場所や心持を不安定にさせるのだ。

本書で一つ危惧するのは、縦書きの俳句や短歌が綴じ代の近くに印刷されており、読者が見過ごす可能性が高いことである。特に、152 ページの野木桃花の俳句は、その前にある多和田葉子の小説と紙の質と色が同じなのでなおさら気づきにくい。それはまさに、見えにくい所にあるのが「胞子性」を宿した作品とでも言うように、コケやキノコの愛好者なら見つけるのはお手の物だろうとでも言うように隠れている。ひょっとして、これは編者の意図するところなのだろうか。

本書は、文学という深い森の中で、かすかに漂い、わずかに降り積もっているような「胞子文学」を私たちの目の前に並べてみせた編者の文学渉獵の力量を示している。最後の解説も秀逸で、「胞子文学」に対する編者の深い思い入れが伝わってくる。なお、武田泰淳「ひかりごけ」を収録しなかったのは、古本屋「蟲文庫」の店主としてのプライドだろうか。(樋口正信 M. HIGUCHI)